

'87年版ベスト・エッセイ集

おやじの値段

日本エッセイスト・クラブ編



文藝春秋

'87年版ベスト・エッセイ集

おやじの値段

日本エッセイスト・クラブ編

文藝春秋

おやじの値段

昭和六十二年八月一日 第一刷

昭和六十二年八月三十日 第二刷

定価 千二百円

編者

日本エッセイ
スト・クラブ

発行者

西永達夫

発行所

株式会社
文藝春秋

電話

東京都千代田区紀尾井町三一二三
(〇三)二六五一一二二一

印刷所

精興社

製本所

中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

©BUNGEISHUNJU 1987 Printed in Japan

ISBN 4-16-341620-x

目次

大根の炭

バーテンの凄味

アイスクャンデー売り

鼻

黒吹雪

父・大學の祝婚歌

私の英学修業

芸は世につれ

石坂洋次郎先生のこと

竹久夢二の伏字日記

真実と、その上に出るもの

広岡達朗に似た男

村松友視

立原えりか

前川ひろ子

羽會部 忠

堀口すみれ子

杉森久英

河原崎国太郎

池部 良

青木正美

田中美知太郎

諸井 薫

12

15

19

23

27

32

41

45

49

54

60

消えた砲車の轍

帰還

九十九里浜のおん馬

詩の町の眺望

大根の炭

味噌とゲートと

石に鳥獣を描く

不二の水

曲折の習字路

中野重治氏の色紙

私の名はミミ

野良猫六匹

吉岡久男

杉山平一

廣澤榮

芳賀徹

矢野誠一

稲見一良

篠田桃紅

植松正

芝木好子

小田島雄志

黒井千次

128 124 119 108 103 98

93 86 82 78 69

墓地の周辺

散歩の靴

道の息遣い

最後の開拓地にて

白化亡国論

「ハレー」ふたたび

名曲受難

味噌とゲートと

象が空を

ブラチナとカラオケ

江戸を出た新都庁

岡田嘉子の秘密の置土産

志水辰夫

木村浩

澤井繁男

開高健

岩川隆

古在由重

戸板康二

寺横武夫

杉浦明平

E・G・サイデンス
アンデス
テッカー

柏木慶子

133

137

140

144

149

153

160

164

170

174

179

ずれ

静寂をとりもどせ

「マイドロー、倫敦」

郷に入っては郷に従え

ナイル・フィッシュ

アジスアベバ

ブラジルのシャイロック

ひとりで食事をする女

地下世界の税金

象が空を

おやじの値段

ヤクザのシャツ

宮地真美子

粉川哲夫

山田章則

大塚光明

本間千枝子

戸田有信

水野良太郎

井上一馬

尾辻克彦

沢木耕太郎

常盤新平

走る風景

十四秒という時間

単位の不思議

生物学的な時間

コアラの涙

涙の解釈学

東大と京大

金になる話

二十六志八片の指環

正二位の阿蘇火山

47¹⁷

近松とわたし

フランク永井と脳死

宇佐美彰朗

倉田保雄

畔上 司

本川達雄

中川志郎

奥本大三郎

森 毅

喜志哲雄

小津次郎

倉嶋 厚

木下周一

秋元松代

三輪和雄

238

242

251

254

258

262

266

270

274

283

290

293

299

土牛先生の写生
おやじの値段

近藤啓太郎
出久根達郎

309 303

おやじの値段――

'87年
版
ベ
ス
ト
・
エ
ッ
セ
イ
集

装幀
竹内和重

大根の炭

バーテンの凄味

村松友視
(作家)

トリス・バーのはしごをやっていた頃は、よくバーテンの芸をながめていた。皮のダイス・カップをカウンターに置き、その外側へピーナッツを列べる。そして、そのダイス・カップを上へ引き上げると、ダイス・カップの周りに列べられたピーナッツが、円状になって残る。ピーナッツの円周は、もちろんダイス・カップよりも広くなっている。それを、バーテンは右手にかまえたダイス・カップでひと掃きして、ピーナッツをその中へおさめてしまうのだ。ダイス・カップの直径よりも長いピーナッツの直径を考えると、見ている者には神秘的に映った。

一直線にひと掃きしているように見えているダイス・カップが、カーブしてピーナッツをすくい上げたか、指で握りつぶしたダイス・カップの直径が、ピーナッツの輪の直径より長くなるか……いずれ、ネタはあるのだろうが、それを承知でこっちをうならせる艶っぽい不良の表情が、あの頃のバーテンにはあった。トランプやマッチを使った手品も達者で、バーテンの芸

はハイボールの心地よいツマミとなっていた。

また、そのスジ風の客や獅子舞いが来たとき、無表情にその連中に近づいて行き、客にそれと覺らせずに断る……あのときの妻味も逸品だった。そう言えば、いつの頃からか獅子舞いがバーへ入って来なくなった。

そんなバーテンが、あるひとつの店の名物だったかと言えば、どこの店にもいたという印象だ。カウンター・バーは比較的若いママもいたから、そのか弱さをカバーしているという役目として、バーテンの腕前はいろんな意味で必要だったのだろう。ママにぞんざいな口をきいているので、できているのかなと思っただけだが、時間が来るとふいと出て行くその背中には、もっとドライな仕事感覚がただよっていた。いや、そう見えて実は先に帰ってママを待っていたのかも知れず、とにかくバーテンというのは謎の存在だった。

水割の時代がやって来てからは、そういうバーテンがバーから消えた。水割、ビール、スパゲッティ、ピザ……といったものを中心とするスナックが浮上し、風紀もかつてより良くなつて、芸と妻味という二つの腕前を駆使するバーテンは、店が必要としなくなったのだろう。

だが、たまにカウンター・バーが恋しくなつて出かけると、何となく伝説の店であったり、名物店であったりして、かつての郷愁とからみにくい。客層も変わり、カウンター・バーで軟弱な知識派がハバをきかせて、ロウランドがどうのハイランドがどうのとゴタクを列べるタイ

ブが多い。新橋のTなるカウンター・バーで、外国帰りの商社マン風が、ひと通りの知識を披露したあと、マスターに向って挑戦的にアゴを突き出し、

「マスター、俺のうちには四十種類のウイスキーとブランドーを置いてるんだけど、マスターのうちには何種類くらいあるの」

他の客に聞えよがしに声高に言った。客はみな、マスターに何とかしてくれないかと願いながら状況を見守った。すると、マスターは表情を変えず答えた。

「うちは三種です」

「三種類……」

「日本酒とビールとウイスキーです」

カウンターの客は快哉を叫びなくなった気分をサカナに、旨い酒を飲んだ。そして私は、かつて獅子舞いやその筋を、やんわりと断っていたバーテンの凄味を、心地よく思い出し、ハイボールを注文した。